

二〇二五年度

適性検査型 第二回 入学試験問題

適性検査Ⅰ（五十分）（全五ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 解答用紙は二枚です。試験開始の指示と同時に、二枚の解答用紙に受験番号と氏名をそれぞれ書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはつきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

□ 次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

(＊印のついている言葉には本文のあとに「注」があります。)

一般に、世界を旅したり、海外赴任したりすると、その土地のことやそこに住む人々のことが気になり始めます。日本人同士で旅したり、任地の日本人コミュニティの中だけで過ごしているなら、窓の外に広がる土地や人々のことを見逃してしまいうでしょうが、一人旅をしたり、何らかのきっかけで現地の人々の行動を直に見たり触れたりした場合には、その土地や人々のことが知りたくなるはずです。そんな折、文化や民族に関して研究するのは何なのかと調べると、たいてい①文化人類学という＊仰々しい名の学問に行き当たります。

いぎ、文化人類学の本を読もうと思って、あたりをつけて本に手を伸ばすでしょう。でも、○○という民族には、これこれしかじかの伝統があり、こんな珍しい言葉や習慣を持っているなどという、欲しい情報や知識はチョロツとだけしか書かれていないかもしれません。＊ポストコロニアリズムがどうしたとか、人間と自然の関係について考

えてみなければならないとか、機能的な面と文化的な面の両面から考察されなければならないなどといった、理屈っぽいことがダラダラと書かれていて、これはお手上げだと、本を投げ出してしまうのです。そうになると、文化人類学を学ぶ道は、＊とこしえに閉ざされてしまいます。このことを逆方向から言えば、文化人類学とは、どこそこにかくかくしかじかの人たちが住んでいて、こんなふうに考えたり生きていたりするという事実だけを紹介する学問ではないということなのです。

別の言い方をすれば、どんな学問であつても同じことが言えるのですが、その学問がどのような経緯で生まれたのか、どんな手法を用いて研究を進めているのか、その学問にはどんな歴史があつて、どんなテーマが取り上げられてきたのかということ、ある程度＊体系的に学んでみないと、そこから断片だけを拾い出しても理解できないようになっていくのです。そうした事実を踏まえ、私自身がこれまで教えてきた授業や、＊フィールドワークで経験したことに基づいて、文化人類学について紹介してみようというのが、本書『これからこの時代を生き抜くための文化人類学入門』です。これまで述べてきた

ことからなんとなくわかると思いますが、文化人類学とは、文字通り、(異)文化や人類のことを扱う学問です。地球上には多様な人間の社会があります。文化人類学者は、そこに生きている人たちがやっていることや考えていることを書き留めて考察するのですが、それだけでなく、そちらの側から眺めてみて、私たちがやっていること、やろうとしていることはいったいどういうことなのかと考えることがよくあります。

選挙の投票率が下がりに続いています。このままでは民意が反映されないで、選挙のたびに、みなで選挙に行こうというキャンペーンが行われます。それはその通りなのかもしれませんが。しかし地球上には、もったものを率先して分配する人が尊敬され、リーダーになる社会があります。人々は、何も持たず、最もみすばらしいなりをして、いる人の言うことに耳を傾けます。そういうやり方に照らして、我々がやっている選挙や政治はいったい何なのか、今一度考えてみなければならぬのではないかと、文化人類学者なら考えます。

あるいは、こんなことも言えます。SDGs(持続可能な開発目標)という言葉をもっとよく耳にします。「持続可能」とは、私たちの暮ら

しの土台にある資本主義は崩さないで、それを持続させるということとです。となると、矛盾を抱える仕組みや制度はそのままということにはならないでしょうか。スローガンありきではなく、私たちがやろうとしていることの根本に遡って考えてみるべきではないか。そういうふうには、文化人類学者は考えるのでしょうか。文化人類学は、地球上の多様な人間の生き方を現地で見聞きする中で、調査して記述分析する以上のことにまで踏み込んでいったのです。それは、海外のある場所で長期にわたって暮らすことから一転して、もともと慣れ親しんでいたやり方を眺め返そうとする文化人類学者にとつてとても自然なことでした。文化人類学は、あらゆる事柄に対してある意味で「意地悪な」「ひねくれた」と言っているような見方をする学問へと進展を遂げてきたのです。それは、何にでもとにかく反対するというのとは違います。今はこうしているが、そうでない考え方ややり方もあるのではないかという思いを常に胸の内に秘めているという意味で、文化人類学は*既成のやり方や考え方を疑ってみる姿勢を*内在化した学問です。そのことが、他の学問にはなかなか見られない、文化人類学の特徴なのです。いや、文化人類学の*特典と言っても

いいかもしれません。

本書は「これからの時代を生き抜く」ために、文化人類学が活用で
きますよ、などと言うものではありません。「これからの時代を生き抜
く」というスローガンさえもいいことなのかどうか、よくよく考えて
みてから口に出しても決して遅くはないというのが、「*斜に構えた」
文化人類学の根っこにある考え方です。ですから、この本を読めば、
「これからの時代を生き抜く」ことができると思っている思い込みそ
れ自体に対してツツコミを入れることもまた、本書の狙い（ねら）です。実は、
②文化人類学に「これからの時代を生き抜く」ためのヒントが充ち満
ちているのは、そうした点においてなのです。

（奥野克巳『これからの時代を生き抜くための文化人類学入門』より）
（おくのかつみ）

〔注〕 仰々しい——大げさな。

ポストコロニアリズム——欧米の植民地支配を正当化する考
え方の終了後を考察し、支配されて
いた側の視点から分析する考え方。

としえに——永久に。

体系的——一定の秩序や規則に従って整然と組
織された状態。

フィールドワーク——学問の性質上、研究室の外で行う採
集、調査、研究などのこと。

既成——既に出来上がっていること。
すで

内在化——自分の内面に取り込むこと。

特典——特別に与えられる待遇。
あた

斜に構えた——物事にまともに対処しないで、皮肉
やからかいなどの態度で臨むこと。
たいしよ

〔問題1〕 ①文化人類学とありますが、これは一般にはどのような

学問だと考えられていますか。解答欄に合うように本文中
から五十四字で探し、はじめと終わりの五字を抜き出しな
さい。

□ □ 学問

〔問題2〕 筆者が考える文化人類学の特徴とはどのようなものですか。

本文中の言葉を使って、八十字程度で説明しなさい。

活にどのような姿勢で臨んでいこうとするのかを具体的に書く。

〔きまり〕○題名は書きません。

〔問題3〕 ②文化人類学に「これからの時代を生き抜く」ためのヒントが

トが充ち満ちているのは、そうした点においてなのです。ありますが、今後、あなたが学校生活を送っていく際に、どのような態度で臨んでいこうと考えますか。本文をふまえて、あなたの考えを、三百字以上四百字以内で書きなさい。ただし、あとの「手順」と「きまり」にしたがうこと。

〔手順〕 1 「これからの時代を生き抜く」ためのヒントが充ち満ちているのは、そうした点とある、その内容を説明する。

2 「手順」1で書いたことと、今まで過ごしてきた学校生活での体験とを比べて、あなたが気づいたことをまとめる。

3 「手順」1と2をふまえて、あなたはこれからの学校生

○最初の行から書き始めます。

○各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○、や。や「なども、それぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。(ますめの下に書いてもかまいません。)

○。と「が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。